第２部　経済研究所公開セミナー

# 埼玉県のサッカー教育の現状 2

**高　峯　弘　樹（駿河台大学サッカー部監督）**

（明石　続きまして、高峯先生、よろしくお願いいたします。）

**高峯**　皆さん、こんにちは。今ご紹介あずかりましたように、今こちらの大学でサッカー部の方に携わらせていただいています、高峯と申します。ドイツのことで何か話してくれと言われまして、少し軽く考えていました。

実際に何をお話ししようかなというところで考えたのですが、あまり思ってないことは伝わらないだろうと。なので、実際、私が２年弱ですけど、向こうにいて、実際、何を感じてきたかっていうのだけお伝えしようかなと。私の前にお話頂いた諸先生方、数字をもとにロジカルにお話しされていますが、私は逆に情緒に訴える形でお伝えできればなというふうに思います。

ドイツのスポーツクラブライフというふうに、まずありますけど、これをどう説明させていただくかというと、私の略歴、人生からひも解いてい

**写真①**

こうかなと勝手に思っております。

この写真①はですね、順天堂大学っていうとこに入学しまして、すぐ入寮した時のものです。私は、今私の前にお話ししていた竹沢先生の後輩に当たります。だいぶ下になります。

スライドでは94年に渡独とありますけど、その前に、1992年に、卒業旅行でドイツを中心にヨーロッパに行きました。友人と２人で、事前にホテルも決めず、とりあえず行けと、とりあえず行って、その場でホテル決めてドイツを２週間回ってこうっていうような旅行をするぐらい、ドイツが好きだったんですね。

なぜかといいますと、当時は今とは違ってインターネットもないですし、サッカーの情報を得るには、月１回の『サッカーマガジン』っていう情報誌くらいですね、その中でこんな日本人が指導者のドイツのライセンス取っているとかっていう記事を見て、「ドイツってライセンス取れるんだなあ」っていうのをぼやっとですが覚えていたりですね。

週に１回、「ダイヤモンドサッカー」っていうので、当時、日本人で初めてドイツでプロサッカー選手だった奥寺康彦さんっていう方がヴェルダー・ブレーメンの１部の選手でプレーしていまして、毎週土曜日の夕方６時から、奥寺選手が出場する試合を食い入るように見ていて、「ああ、ドイツってサッカーがすごいんだ。指導者のライセンスがあるんだ」っていうのをぼやっと思っておりました。

それで、順天堂大学に入学して、その当時順天堂大学っていうのは、竹沢先生たちのご尽力のおかげで関東１部の強豪でした。私がいた時には当時のユース代表であるとかですね、高校サッカー選手権で大活躍したテレビのヒーローが続々入学してきて、私の出る場なんて全くありません。で、次第にへそ曲げて、「サッカーなんかやってられないよ」なんて思っていたんですけど。

ただ、大学４年の秋くらいですね、卒業する前になって、果たしてこれでいいのかと。その当時はサラリーマンの就職決まっていたのですが。これでいいのかなあって、本当に俺、サッカーから離れていいのかなって深く考えていたんですね。

そしたら、世の中が「Ｊリーグが始まるぞ」ってなりまして、私の大学の同期であるとか、高校の後輩がですね、その後輩というのが高校当時私の控えだった選手がプロ選手になるって話がどんどん入ってきまして、何でだろうと。これは負けてられないなと。でも選手としてはもう無理だと。たばこも吸っちゃったし、お酒も飲んじゃったし、これはもう無理だなと思っていたところでですね、「そうだ」と。「指導者になって、Ｊリーガーになったやつには負けないぞ」と。そのためには何が必要だと思った時に、しっかりとドイツ、海外のライセンスを取って、箔を付けて帰ってこようというよこしまな気持ちでですね、ドイツに渡ろうというふうに思っておりました。

それで、卒業してから２年間のサラリーマン、百貨店で勤務していまして、１年目は紳士服売り場、２年目は食器売り場で働いてましてね、それで、お金をためて行こうとその時点で決めてたんですね。なので、アルバイト感覚で仕事をしていたという、とんでもない会社員だったんですけども、そこで24歳の時に、もう行こうと決めました。つても全くない中、片っ端から電話をして、手紙を書いて、いろんな人に会って。今、日本サッカー協会の会長であられる田嶋幸三さんにも会いにいって、どうにか連れてってくれというようなことまでしておりました。

それで、何とかつてを見つけてですね、94年にドイツに渡ってきました。それでまずドイツ行ってからは語学学校に行って、ドイツ語何もしゃべれない中で行きましたから、語学学校に行かなきゃいけないっていうことを言われて行ったんですね。そこが当時、イザローンといって、ドルトムントの近くにある本当に小さな田舎町だったんです。

語学学校に行ってるだけではしょうがないってことで、町のクラブに入りました。この辺は、先ほど野田先生がクラブのことをお話しされていましたけど、野田先生は経営的な部分でお話しされましたけど、私は実際そのクラブでプレーをして、クラブ員としていたという、その辺からの話はできるかなと思ってます。

クラブチームで週３回練習して、日曜日試合という生活を送っていたんですね。語学学校に行きながら、クラブチームに。そういう事をやってま

した。

２年目ですが今度は２年目からビザを延長しなきゃいけないっていうことで、学生でいなきゃいけないんですね。語学学校はもう辞めていましたから、どうやって学生でいようといったときに、ケルンの体育大学に聴講生という形で入れたらビザが延ばせるという話を聞きまして、ケルン体育大に聴講生として行きます。

それだと、ケルンまで行くのにも、場所の関係からいくとイザローンから遠いので、デュッセルドルフっていう、今、日本人が一番いる町ですけど、デュッセルドルフに引っ越したんですね。で、デュッセルドルフからケルン体育大の聴講生としてやることと、あと１個、今度は、後で写真出てきますけど、同じくクラブ、もう一回クラブに入って、地元のクラブに入って、サッカープレーヤーとしてやること。

それともうひとつ、フォルトゥナ・デュッセルドルフといって、今度、原口とか宇佐美がいるチームがありますね。当時も２部だったんですけど、そこのＤユーデントといって14から16歳のチームに帯同ができると。聞こえはいいですけど、ただいるだけです。ただ、それができる可能性があるんだということで、それに飛びついて過ごしていました。

ただ、サッカーに関して言いますと、当時のドイツは今と違って、本当に古い形のサッカーをしていたし、指導法に関しては、帰国してからいろんな講習受けたりすると、よっぽど日本の方が優れて。優れてというか、先進的な感じでしたね。

なので、実際、フォルトゥナ・デュッセルドルフに帯同していても、もっとこんなふうにすればいいのに、何でこんなことしかしないんだろうと、ずっと思っていたんです。そうすると、「早く日本に帰ってやりたい、早く日本に帰ってやりたい」ってことばっかり頭に浮かんでですね、帰ることしか考えてなかったですね。

そのためにはライセンスを取らなきゃいけないということで、これもいろんなつてを頼って、講習を受けるタイミングをずっと狙っていました。非常につらい時期でしたね。なかなか講習受けられないし、早く日本に帰りたいしっていうことで。

で、何とか講習にたどり着いて、約２週間。１週間が実技、講義がもう１週間で２週間でＢ級取れるんですけど、ドイツＢ級のライセンスが。実技と講義と。それで、３週目がテストです。トータル３週間、ディスブルグのスポーツシューレといって有名な場所があるんですね。そこで３週間も泊まり込みでずっとやって、何とか1996年の２月２日、私の誕生日です。誕生日に、ライセンスが取得できたという素晴らしい落ちがついた話なんです。

そんなことはどうでもいいですね（笑）。それでですね、私が２年目に居たチームでSVロウハウゼン、SVというのはシュポルトフェラインの略でスポーツクラブみたいな意味なんですけど。ネットで見てみたら、今、こんな上空が写真、出てるんです。「ああ、こうなんだ」と思って。確かに、ここで僕、ここでプレーしたんです。ここは当時、森でですね、シーズン前とか、こういう森の中を走ったりしてたなあと。今はこうやって人工芝ができたんですけど、当時はこの土のグランドだけで練習してました。

それで、ここに駐車場があって、ここにロッカールームがあったり、あとでまた出てきますけど、ドイツのクラブっていうのは必ずロッカーがあってシャワー浴びれますし、必ずお茶飲めたり、ビール飲めたりとかですね、そういう喫茶店みたいなとこが必ずあるんですね。

今回私が何をお話しさせていただきたいかって、サッカーのことでは、もちろんそうなんですけど、こういったすべてのスポーツクラブの果たす役割の素晴らしさというのを、実際２チームほど、２クラブほどいた、実際、私が感じたことをちょっとでもお伝えできればなというふうに思います。言葉で言うより、写真の方がいいと思うので。

写真②はロウハウゼンの、さっき上から写したクラブチームの脇です。毎週、リーグ戦が日曜日です。ドイツっていうのは日本と違って、日曜日は、お店はほとんどどこも開いてないですね。買い物もできないし、お茶も飲めないし、何にもやることないです。だから、町の人はサッカーの試合見に行きます。小さな町だったら、ほぼほぼ来るんです、試合を見に。すごい、僕らがいたチームなんていうのはおじさんばっかりのチームで、そんな激しくはないんですけど、そういう試合を地元の人がこうやって見

**写真②**

にくるんですね。

**明石**　質問していいですか。

**髙峯**　はい。

**明石**　クラブでお金は取られるんですか？

**髙峯**　はい。ここはお金、取らなかったです。はい。お金、取るとこもありますけど。

こういうとてものどかな雰囲気の中で試合をしていくんですね。

それで、スポーツクラブっていうだけに、サッカーだけじゃないんですよ。ここ、何があったかって、乗馬クラブがあったんですね。乗馬。サッカーやってるちょっと遠くで、馬がちょこちょこ、ちょこちょこ歩いてたり、あとは、テニスコートもあったりするんですね。

サッカーだけじゃなく、色々なスポーツが楽しめて、先ほど野田先生がおっしゃられていましたけども、それが、日本でいうと月500円とか1,000

**写真③**

円とか払うだけで、できちゃうんです。それで、僕みたいな外国人がぽっと行っても、「ああ、いいよ」と言って、すぐ入れてくれるんですね。何ていい国だろうって思いました。それは全部、先ほど先生がおっしゃったように、いろんなスポンサーがついたり、国や州からお金が出ているのだと思います。

この写真③は、多分パーティーの時です。僕も何回か呼んでもらったりするんです。クリスマスだったり、いろんなパーティーに来いと。ドイツ人はヨーロッパの中でいうと、結構真面目な感じのイメージありますけど、すごい、日本人よりももっとラテンの乗りがありまして、楽しいこと大好きなんですね。仲間といるのが大好き。お酒飲むの、大好き。歌うのが大好きであったりと。大人がこれですから、子供たちもこうやってすごい楽しんでるんです。

写真④は練習の風景ですね。これ、ロウハウゼンの人工芝なんですけど、これ見て、ちょっと僕、当時を思い出したんですね。土のグランドだったんですけど、こうやって、夜、何時かな、６時ぐらいからですかね、みんな仕事終わった後に来て、こうやって練習前に監督・コーチとしゃべりながらリラックスして、時間がきて練習をすると。それで、終わったら、

**写真④**

シャワー浴びてクラブハウス内でビール飲んで喋って帰るというような、実際のクラブライフというか、ドイツのスポーツクラブというのはこんな感じです。

そこに、誰に強制されてやるわけではないというのがあります。強い、厳しいとこでやりたかったら、自分の実力を出して強いチームに移籍すればいいだけの話で、こうやって楽しみたいだけだったら、楽しみたいだけのクラブチームもあると。それでも勝負にこだわる姿勢はＪリーガーより強いですね。これは間違い無いです。いずれにしても自分で選べるというスポーツの環境が、ドイツにはありました。

ここからは本題なんですけど、私が何を一番お伝えしたいかというと、こんな生活をしながら一番私が感じたのは「ドイツ、すごいな」とか、「何でこんなことできるんだ」じゃなくて、「悔しい」だったんですね。すごいなと。「何でこんなに幸せな時間を、この人たち、過ごしてるんだろう」って思ったんです。何が幸せかっていうのを、この人たちは知ってるんだなって思ったんです。

週末にスポーツクラブに行って、こうやって愛する人たち、家族であったり、恋人であったり、近所の友人です、小学校の時からの友人であったりとかっていう人たちと、交流を深められると。それこそサッカーを媒体として、サッカー見に行くからって、クラブに行くと必ず誰かがいて、

「おお、元気か」と、「どうしたんだ、最近」っていうような話をしながら、暮らしている。

そんな時間を過ごしてるというのが、当時なぜか分からないですけど、外国で１人暮らしで寂しかったからかもしれないですけど、とてもいいなと思ったんですね。何て素晴らしいんだろう、この人たちはと。人生の楽しみ方を知ってるなって、こういうの、いいなあって、ずっと思って、とても悔しい思いをしてました。

繰り返しになりますが、何が幸せなのかと。ぜいたくな時間って何なんだろう。別にスマートフォン持って、何かやることが幸せじゃないし、お金たくさん持っておいしいもん食べるのが幸せじゃなくて、僕が思うのは、愛する人たちと過ごす時間がある、こういうことできるのが一番ぜいたくなんだなっていうのを、すごく感じたのが一点です。

もう１点は、地域で生きること、地域で生かされることの幸せな部分を、すごく感じたんですね。僕がドイツで所属したクラブは二つとも小さなクラブでしたから、本当に地域と密着してですね、先ほど言いましたけど、昔からの友達とか、昔からの友人と、こうやって楽しい時間を、話ししたり、過ごしたりできるし、天気のいい日にビールを飲みながら時間を過ごせて、何て素晴らしいんだろうって。（写真⑤）

地域の自分たちの、俺たちのクラブに貢献できる。ちょっとずつ、こういうとこでお酒飲んだらお金払いますから、これがクラブの運営にちょっ

**写真⑤**

と回っていたりするんですね。だから、ビール飲みながら、小さなクラブの運営に俺は手を貸してるんだっていう気持ちにもなれるし。そうすると、ますますこのクラブを愛するようになるんですね。これは素晴らしいなと思って、また悔しかったです。何で日本ってそういうのがないのかなって、すごく思いました。

そして、またそのクラブが常にあるんです、長い間。そこに行けばクラブがあるんです。そこに行けば誰かに会える。知っている人に会えると。気を許せる仲間に会えるっていうものがずっとある。そういう幸せっていうのは、本当に素晴らしいものだという気持ちになりました。

もちろんサッカーもそうなんですけど、それ以上に、僕がドイツに行って何を感じたか、学んだかっていうと、そういった部分ですね。何が幸せなんだろうって。地域で生かされることっていうのは、何で、どうしてこんなに幸せなんだろうっていうのを強く感じて、今もおります。

そこで、私が勝手にまとめるわけじゃないんですけど、果たして、じゃあ、駿河台大学が、じゃあ、どんな役割を担えるかっていったときに、こういった一つのクラブというか、そういう場になることができれば、すごくいいんじゃないかなって思うんですね。

例えば、ここは体育館ありますし、グランドありますし、野球場、すごいのがありますし、毎週日曜日にそこで何か、子供たちが遊んだりもいいですし、高齢者の方が体を動かすでもいいですし、そこで、終わった後にちょっとお茶が飲める、ビールが飲める場所があって、「また来週から頑張ろうぜ」っていうような、そんな空間、そんな場ができたら、どんなに幸せなんだろうって思います。

これから寿命が100歳までともいわれる時代ですから、そういう場、そのような施設があると良いですね。それを大学がですね、そういう場を担ってもらえると、飯能市の中でこの駿河台大学が幸せな空間になって、また愛される大学になる。それが、駿河台大学がこの地域にできる一つ大きなことなんじゃないかなっていうふうに、私は勝手に思った次第でございます。

長くなりました。ありがとうございました。